The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓愈の文學における諧謔とユーモア
Author(s)	清水, 潔
Citation	懐徳. 1961, 32, p. 1-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90358
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

韓愈の文學における諧謔とユーモア

清水潔

一

第八世紀の後半から、第九世紀の前四半期に亙つて生き、所謂中唐の文壇において、散文では古文復興の運動を實踐し、四六駢儷の繁縟な文體を追放することに努力し、詩においては奇險と評せられる作風を以つて、盛唐に完成した詩歌の局面を打開して新機軸を出そうと試み、詩文共に當時における第一人者であつた大文豪、そして又、學問や思想の上では孔孟の遺緒を千年の後に繼ぐものと自任し、老莊道釋の敎を異端として排擊し、道德仁義の說、及び人性の問題に一家の見識を提示して、次の時代の宋代哲學の草分けを爲した人物といえば、それは韓愈、字は退之、世に昌黎先生と稱せられるその人であることは言うまでもあるまい。

韓愈は二十五歲の年に進士に登第し、その後地方官として汴州觀察推官の役を振り出しに四門博士、監察御史、陽山令、國子博士、都官員外郎、刑部侍郎、潮州刺史、國子祭酒、京兆尹、吏部侍郎等を歷任し、浮沈消長を繰りかえしてその五十七年の生涯を終つた。その生涯は全く官僚、又は學官として官祿を食みつつの生活であつたが、半面においては又同時に文士詩人としての活動を以て終始した生涯でもあつた。彼の詩文の名聲と實力とに傾倒して、その門下に集つた所謂韓門の弟子としては張籍、孟郊、皇甫湜、李翺、賈島、侯喜、劉師命、張徹、張署等、當時の文人

詩人として名を成した人が多く、これらの弟子に對する韓愈の情誼は頗る厚く、就職の世話も燒き、金錢の面倒をも見、又誘掖これ力め、大いに親分肌を發揮している。彼とその一門の子弟らが當時の詩文壇に活動した狀況は、わが國の明治末期から大正年代にかけて、夏目漱石の門に集つた門下生と、漱石との關係に相似たものがある。韓愈には多分に漱石的な風格、或は更に後の菊池寛のような文壇ボス的風格があつたようである。漱石の作品には往々にして諧謔、ユーモアの味い豐かな作品があり、「猫」「坊ちやん」等はその尤なるものである。英國文學に專門的造詣深く、漢詩漢文の素養も一等地を拔くものを有ち、明治大正の文壇に其の知性教養の高き偉大な文學者として、渇仰心酔の信者を廣汎な層に亙つて獲得したこの文豪は、又一流のユーモリスト、諧謔家たる面目を具えていたが、韓愈も亦諧謔趣味横溢し、多分にユーモアを解した文人であり、兩者のこの共通した特色は、筆者の興味をそそること甚だ深い。韓愈の文章の剛健、暢達なること、その詩の奇險、高峭なることについては既に先人の論に委曲が盡されていると思うので、私はこの際、韓愈の文學作品に見える諧謔、ユーモアの諸相を摘出して、韓愈文學の一殊相を觀察して見ることにしたい。

二

韓愈が諧謔や冗談を好み、時々假構の話、卽ちフイクション的な話を聞きもし、話しもすることを好んだことは、張籍から韓愈に遣られた手紙によつて察することができる。韓愈が二十九歲、汴州觀察推官として勤務していた頃から、すでに張籍との交際が始められたが、張籍は自分より數才の先輩にあたる韓愈に、學者思想家として天下に雄飛すべき偉材がすでに具つていることを確信し、大きな期待と關心とを寄せたのであるが、この期待と關心とを寄せている韓愈の平生の生活ぶりを見ていると、聊か將來の發展の障碍になるのではないかと患いられる事どもがあり、之に慊らなかつた張籍は、韓愈に書簡をもつて、自分の抱いている絶大な期待を述べるとともに、注告すべきことを眞

正面から説いているのである。その手紙の中には次のような言葉が述べられている。

「近頃貴下のすることを見ていると、大概駁雜無實の説を尚び、人にもそれを自分の前で陳べさせて歡びとしておられる。これは貴下の人格に拘わることだ。」

と。そして更に

「博塞（双六）の戯をして、人と賭勝負するなど、以ての外、君子のもとよりなすべきことでは無い」。

とたしなめている。此の二點の忠告に對し、韓愈は、「あなたは私が駁雜無實の説を爲すことを譏られるが、これは私の遊び事に過ぎないのである。これを酒色に比べれば、よほどましではないか。あなたがこれを譏るのは、風呂へ一緒に入つて、相手が裸であることを非難するようなものだ。博塞の譏りの方も受け入れかねる」とつつ放し、且つ、

「昔は孔夫子でさえも、戯れ事を爲さつたものだ。詩にも、「善く戯謔するは、謔と爲さず、（善戯謔兮、不爲虐兮）」

とあるではないか。禮記にも「張りて弛めざることは、文武（周の文王、武王）も能はず」とある。何も道を害うことではあるまい。」と強辯している。之より先、韓愈は京師に居て、しきりに就職運動を試み、時の宰相に三度まで自己推薦の書を上つておるが、その第一の書の中に、次のようなことを書いている。

「私の讀むところの書物は、聖人の書であり、楊墨老釋の學は其の心に入る餘地がありません。其の著わすところは、皆六經の旨を約めて、文を成しております。邪悪を抑え正義に興し、時俗（世間）の惑つているところを辨じております。窮乏の生活で身をひきしめて暮していますが、それでも時に感激怨懟奇怪を述べた言辭を以て、世間に知られることを求めています。然しそれでも教化に悖ることなく、妖淫、諛佞、譸張の説は、その中に出てまいりません。」（上宰相書）

この手紙によると、韓愈も時には「感激、怨懟、奇怪」を述べた言辭を成したというのであるが、これらの言辭の內容はそれそもそも如何なるものであつたのであろうか。そのあと、「妖淫、諛佞、譸張」の説はそこには出て來ぬと

言つているのを併せて考えると、何か小説的作品か、寓言的作品の類かとも想像され、且つ一應世に知られることを目的として書いたというているのだから、世間の興味に投ずるものでなくてはならなかつた筈のものだと想像することは許されよう。ただ當時のそれらしい詩文は何も殘つていないから、想像の域を超えることはできないが、然し、これと張籍が指摘している「駭雜無實の說」というものとが、何か一脈の關聯のあるもののようにも思われるのである。それでは韓愈が好んだところの「駭雜無實の說」とはどんなものであつたのであろうか。恐らく小説的なフィクション的な架空の物語、或は莊子の中に出てくるような寓言のようなものであつたかも知れない。北宋の蘇東坡は、黃州及び嶺外に在任した頃誰でも人にさえ會えば、諧謔混りの話をとめどなくやり、話のない相手には幽靈（鬼）の話を無理强いし、そんなものは居らぬからと辭退すると、それでも何とか構え事をしてでも、怪談をやれとせがんだという逸話が殘つているが[1]、韓愈もそんな好奇の氣持ちで、自ら語り、人にも語らせ、そして又それを筆に物したものであろうかとも想像される。引いている詩經の文句によつて、すでに彼が諧謔好き、冗談好きの人間であつたことは明かである。冗談を言つたり、諧謔を弄んだり、時に感激、怨懟、奇怪の心情を寄せた文章を綴り、さては又、博塞で賭け勝負などをやつて暇つぶしもする、決していつも四角四面に難しい顏をして、君子先生としておさまつていた人ではないというのが、韓愈の面貌であつたと思われる。

韓愈は豐かなイマジネーションの力を有つた人であつた。文藝批評家は彼の詩を評して、「奇險[2]」という文字を以てその特質を表現しているが、それは韓愈の詩が往々にして、その用語が頗る難しく、句法もなだらかでなく、彼が平素自ら豪語していたように、陳篇套語を敢て避けようと努力したことから生じた表現技巧や、敍述の工夫の結果である。然し「奇險」という評語は、文字の上のみならず、表現された內容についても言えることで、それは彼の異常に逞しい想像力の生み出したものが、非凡であつたからに外ならない。彼の想像力、又は聯想力がいかに逞しいものであつたかを證明する一例として、有名な「南山詩」の一篇を擧げることができる。この詩は五古の長篇であるが、そ

の中に南山の風物を描寫するのに、「或は……の如し」という文字を五十一回も使つて、極めて譬喩的に、又ほしいままに聯想を奔らせて、敍述を疊み重ね、壓倒するような筆力でもつて、縱横無盡に、南山の山容を描寫し、歌いまくつている。次に示すその一部を以て、その大概を知ることができるであろう。

（前略）

或は連なること相從ふが如く、
或は蹙まること相鬪ふが如し、
或は妥なること弭伏するが如く、
或は竦るること驚雛の如し、
或は散ずること瓦解のごとく、
或は赴くこと輻輳のごとし、
或は翻ること船の遊ぶがごとく、
或は決すること馬の驟るがごとし、
或は背くこと相惡むがごとく、
或は向ふこと相佑くるがごとし、
或は亂るること抽き出でし筍の如く、
或は嵲きこと注げる灸のごとく、
或は錯はること繪畫のごとく、
或は繚ること篆榴のごとく、
或は羅なること星の離るがごとく、

或は蓊(しげ)ること雲の逗(とど)まるごとく、
或は浮かぶこと波濤のごとく、
或は碎くること鋤耨のごとく、
或は賁育の倫(たぐひ)のごとく、
勝を賭して前購に勇み、
强を先にして勢すでに出で、
鈍を後にして誼譳を嗔る、
或は帝王の尊の如く、
叢集して賤幼を朝せしめ、
親しむと雖も褻狎せず、
遠しと雖も悖謬せず、
或は食案に臨むがごとく、
肴核飣餖紛たり、
（以下略す）

といつた調子のものである。ここに見る空想と聯想の豊かさは、韓愈の文學における一特長で、彼はこの空想力、聯想力を驅つて、屢〻フィクション的な詩や文章を物しているのである。ところが空想假構を以て書き上げた彼の作品は、面白いことに、又同時に、諧謔、滑稽、ユーモアに充ちた內容のものともなつている。文としては、「毛穎傳」「送窮文」詩としては「讀東方朔雜事」「陸渾山火」などがその例である。というのは、フィクションであるという意識が、彼の筆を戲文謔詩的に走らせたということになつたのであろう。

三

假構と諧謔趣味とを併せた作品の一例として、「陸渾山火」を見ると、これは陸渾の尉となつた皇甫湜の詩に和したものであるが、陸渾山が山火事ですつかり灰燼に歸したことについて、韓愈も空想假構の筆を用いて、その山火事の狀態を極めて凄烈に而も面白く描寫し盡しているのである。すなわち彼はこの火事をば祝融という火の神が、手下の鬼どもをひきつれて、亂舞、亂痴氣の限りを盡くす大饗宴の有樣に見立て、極めて奇怪な狀景描寫を試みているのである。用いられている文字が頗る難しく、平素見ることのない文字があり、印刷するにも困難なぐらいのものが多いから、詩の筋立てをあらまし說明することにする。この詩は七言詩で五十八行から成り、簡約に詩全體の言うところをまとめると、山火事が猛烈に起こり、山中の一切のものを燒き盡くし、鳥獸龍魚も皆蒸し燒きになつて、脫れるものがない。山の燒けて餘燼の盛な有樣は、宛も火正（火の神）祝融が、部下を集めて大饗宴をやつているような跳梁ぶりである。燒けこげた動物どもはそのまま饗宴の御馳走である。水の神の顓頊も、その下働きの玄冥も小さくなつていて手が出せず、その輩下の黑螭も火事を偵察に行つて、却つて頭に火傷をし、やむなくこの次第を上帝に訴え出ると、上帝がいうには、冬は火の跋扈する時節だから、どうにもならない。今は暫く我慢してひそんでおれ、七八月（陰曆の秋の時節）にもなつたならば、水は勢力を得られる。その時には大いに仇をうつがよく、上帝も手助けをして、祝融を崑崙山へおしこめてやつてよいと申された。というような事を歌つているのである。到底人力を以てとり鎭めようのない猛烈な山火事、そして一切を燒き盡した後、火勢のなお山を蔽うている狀況を、いささか戲曲めいた構想を以て描寫しているのであるが、怪奇な想像を縱にして歌い上げたこの一篇は、韓愈の詩中においても、特別に異色有り風變りな作品で、彼の空想假構の力量が並々でないことを知らしめ、更に言うならば、彼には虛構の上に立つ小說的作品を物する力量が、充分に溢れるほど備つていたということを示しているのである。

山火事の燃えさかる有様を火正祝融の大饗宴に見立てて描寫した部分は、極めて具象的な感覺に充ち、且つ一面極めてユーモラスでもある。その描寫を醵譯して見れば次のようである。

「祝融は自分の勝手にできる時をえて、部下に酒の振る舞い。眞赤な寶玉のばらまかれた花園が解放される。蓮の花が開き、圜一杯に鮮かに澤山咲いている。無數の鐘鼓が喧しく鳴りひびき、高低さまざまの音が集まり鳴つて、篪塤（樂器の名）の音のように沸く。赤い幟や紅の旗。又紫のかざり旗。炎熱を司どる火神たちは、朱色の冠、朱色の褌。その皮膚は赤漆のようで、脾腹も臀も皆赤黑い。逞しい胸、ぼてつとした腹、その乘る車は空に向かつて轅があがつている。赤ら顏して朱の韋皮をまとい、豹の皮の弓袋をもつている。霞の車に虹の手綱。太陽はその車輪だ。車にさがるは赤いふさ。車蓋も赤く、緋色の旗が風に靡く。紅の帷、赤い幕がめぐらされ、お祭料理の肉がどつさり。血の池が風に波立ち、肉は丘のように積まれている。それらを盛る頗黎の盆は深い谷だ。五岳は食器、四方の海は酒樽。酒汲みかわして笑いさざめく。その食べようは雷が山を裂き、海の水がひつくり反るような勢い。齒や牙で嚙み散らし、舌と腭とが裏がえる。稻妻が走るかとばかり、彼らは赤い目を大きくむいている。」

炎々と燃えさかる火焔、燒けはじける物の音、火玉となつて地に散らばる無數の白熱したもの。炎が風に靡きはためく。鳥獸の肉がくすぼりにおう。峯も谷もところとして炎ならぬは無い。時々はげしく爆發的に火の子が飛び散る。そういつた狀況を火神共の大饗宴に見立てての描寫は、まことに想像力の頂點を示しているではないか。ある人の說に、[3]「この詩に火事の有様を寫したところは、法華經の方便品中、火宅の喩の敍事文に極めて類似しているが、佛教臭を見せないのは、その神髓をとつて、儒教的に燒き直して見せようとしたのであろう。」という意味のことが述べられているが、まことにその比喩の幻怪味たつぷりな描寫は、或いは印度文學に影響されているとも見られぬわけではない。而も火神達が齒を嚙みならして食べ散らす物凄いような有様や、大きく目をむいていきり立つている表情の描寫の中には、又韓愈一流のユーモラスな情緒が漂うてもいるのである。

四

韓愈の作の中で、この空想假構とユーモアの精神とを併せて十二分に發揮したのが、「毛穎傳」である。韓愈の出た中唐の時代は、短篇小說の大いに流行した時期で、進士試驗に應じようとする受驗者達が、往々主試官の邸宅に投じた所謂溫卷(4)の中にも、短篇の小說の作品が混えられたと見られ、又當時は著名な文人が小說的作品を物している場合も多く、それは古文復興運動とも關連(5)があり、古文の鍛練はしばしば小說を書くことによつても行われたと見られており、張籍がいうところの「駁雜無實の說」というのも、或は韓愈はそうした短篇小說めいたものを好んだか、書くことを試みたかしたのではないであろうかと想像される。そしてこの「毛穎傳」は戲文ではあるが、正に短篇の史傳小說というべき性質のものである。すなわちこの「毛穎傳」は、「筆」をば人格化して、これに毛穎という名を與え、筆の發達史と、その文化的功績とをば、毛氏一家の傳記に仕立てて、空想的假構を縱にして綴つた小說的作品である。その描寫はユーモラスであり、諧謔味に溢れ、而も自ら筆の歷史とその文化的價値をも認識させるのである。秦の將軍蒙恬が筆の發明者であると傳えられていることは人の知るところ、そこで「毛穎傳」の最後のくだりは、秦の始皇帝が政事に鞅掌し、自ら筆をとつて萬機を裁決したことを述べ、その際始皇の側に、筆は墨硯紙の三者と共に常に離れることなく侍つた次第や、筆の禿びて用を爲さなくなる次第を、次のような妙趣橫溢の趣向を以て擬人化して描敍しているのである。

上嘗て（毛穎を）呼んで中書君と爲す。上親しく事を決し、衡石を以て自ら程る。宮人と雖も左右に立つを得ず。獨り穎は燭を執る者とともに常に侍す。上休めば方に罷む。穎は絳人の陳玄（墨のこと）、弘農の陶泓（硯のこと）及び會稽の褚先生（紙のこと）と友として善し。相推致し、其の出處必ず偕にし、上、穎を召せば、三人の者、詔を待たずして、輒ち俱に往く。上未だ嘗て怪まず。後、進見せるに因り、上將に任使すること有らんとし、之を拂拭

す。因りて冠を免ぎて謝す。上、其の髪の禿げ、又摩盡する所、上の意に稱う能はざるを見る。上嘻笑して曰く、「中書君、老いて禿げたり。吾が用に任ぜず。吾れ嘗て君をば中書と謂へるが、今や書に中らざるか」と。對へて曰く、「臣は所謂心を盡す者のみ」と。因りて復た召さず。封邑に歸り管城に終る。其の子孫甚だ多し。中國夷狄に散處し、皆管城を冐す。惟だ中山に居るもの、能く父祖の業を繼ぐ。

これだけを讀んでも、韓愈のユーモア、諧謔の氣分がいかに豊かであり、且つ才氣がいかに勝れていたかを知るに十分であり、小說家として立つても、大手筆を振うに足る十分の才能の持ち主であつたことを改めて認識するのである。一部の韓愈研究家は、先に述べた張籍の所謂「駁雜無實の說」というのは、この「毛穎傳」をさしているのであろうと考えているが、韓愈の友人柳宗元が、「讀毛穎傳後題」に書いているところでは、柳宗元が始めてこの「毛穎傳」を讀んだのは、彼が永州司馬に左遷させられ、南方に職を奉じていた時の事であり、元和五年十一月の日附がある。元和五年といえば韓愈が河南縣令となつた年で、すでに四十五歲である。三十歲以前にもし「毛穎傳」が書かれたとすれば、柳宗元がそれから十數年も後れて、漸くこの問題作を讀むということになり、これは韓柳二子の關係から見て、ありえないことだと考えられる。柳子は「毛穎傳」を讀んで、大いにその奇文であることに感歎し、世間の人が俳諧に亙るという理由で、此の作品を笑い非ることのあるのを憂慮し、極力「毛穎傳」の價値を辯じているのである。そして、柳宗元は諧謔が決して退けるべきものでは無く、大いに效用のあるものであることを强調しているが、その事は同時に、世間には諧謔やユーモアを品の惡いものとして退けるような偏見や通念が存在していたことを證明するものである。張籍が「駁雜無實の說」と言つたその言葉の語感の中にも、たといそれが「毛穎傳」をさすものでは無かつたにしても、この世間的通念と同樣な意識がにじみ出ていることを蔽うことはできない。

五

さて、諧謔とは何か、ユーモアとは何か、それを定義的に述べることが先ず論文作成に當つての必須な前提條件であるかも知れないが、それは巧妙精緻なる思索をめぐらす思想家や學者先生に任すことにして、ここでは單にその效用の一端について私見を敍べ、以て韓愈を論ずるのに便宜な素地を作つておこうと思う。先づ諧謔やユーモアの效用として考えられることの一つは、對自的效用で、それは一種の緊張緩和（氣持を寛やかにする）の作用をはたらき、次の一つは對他的效用で、自他の間の空氣を和らげて、堅苦しさをほぐす作用をはたらく。又物の見方を面白くさせることによつて、生活感情に彈みをつけることにもなり、四角な道理を丸く圓滑なものにして見せる效用もある。かくして精神は幅の廣い振幅を以て運動し、明るい雰圍氣を擴げることにもなろう。そのような意味で、諧謔やユーモアは、人生の齒車に注す潤滑油ともなり、無味の物事に添える滋味の調味料ともなるのである。

人間は複雜な社會關係の中に生きているから、苦しいこと、腹立たしいこと、悲しいことと、樣々な事柄に出會うであろうし、生物としては老病死などの苦にも常に直面していなければならぬ。此の世に生きて、貧窮、身世の不遇、老衰というような狀態に身を置く時は、誰しも惱み悲しみ苦しまざるをえないであろう。そんな時、諧謔の精神、ユーモアの氣分が、往々にして自己を窮境から精神的に解放する效用を發揮するであろう。これが諧謔、ユーモアの對自的效能でなければならない。韓愈の詩文の中には、この三者、卽ち貧窮、不遇、老衰に直面して、それぞれ一種の自己的解決を、ユーモア精神によつて果たしているものが見出だされる。暫くそれらについて敍べて見よう。

先ず第一の貧窮について——。

韓愈は莊園もある官僚地主階級の出身者であつたが、二十歳代の長安遊學の頃から、家計が次第に苦しくなり、貧窮生活を經驗するようになり、[6] 時の宰相にそのことを泣訴した手紙などもある程だ。學官となつてからも、手元不如意のことが多く、昔の彼の國でもやはり學者の生活は餘り裕かで無かつたと見え、詩文の中で貧乏をこぼしているところがある。或は貧乏ぐらいをこぼさなければ、詩も文も面白くならないのかも知れないが——。さて彼は四十過ぎ

の年、國子博士、卽ち國立大學教授という職についた頃、「送窮文」を書いて、その中に貧乏神の厄拂いをした事を敍べている。それはいかにも滑稽諧謔に滿ちた筆致で書かれた戲文である。事は元和六年正月乙丑晦日のこと、主人は永年自分につきまとう貧乏神（窮鬼）を追い出す工夫をして、厄拂いの行事をするのであるが、おどり出た貧乏神は主人に向つて、「あなたとは四十年以上の長いつきあいだ。どんな時にもわしはあなたから離れようなどと不人情な氣持ちを起したことは無い、世間があなたを見離した時でも、わしはあなたに背かなかつた。今更そう外々しくすることはあるまい」という挨拶である。これに對し主人が言うには、「お前は俺が知らぬと思つているのか。お前の仲間は五人居るぞ。智窮（智慧貧乏）、學窮（學問貧乏）、文窮（文學貧乏）、命窮（運勢貧乏）、交窮（交際貧乏）がそれだ。この五つの貧乏神がかくかくしかじか俺をひどい目に會わせたぞ」とて、口說き立てると、五匹の貧乏神は手を摶つて笑いこけ、「あんたさんは結局われらと緣は切れぬ」とやつつけるので、とうとう主人も參つてしまい、再び彼等を上座にひき直すというのが、一篇の趣向である。韓愈は所詮これらの窮鬼から離れられぬのがわが身の運命だと覺つた形で、この諧謔文を綴ることによつて、自らの氣持ちを寬うしたのである。韓愈は學者であり、文人であり、命令一本で動かされる官人でもあり、又俸給生活の中身の知れた財布で世間と交際せねばならぬ名士でもあり、從つて彼につきまとう五匹の窮鬼は、それぞれそれに相應した性格をもつ厄神共であつたわけである。

第二に身世不遇の歎きについて――。

身世不遇の歎きも、韓愈の屢〻經驗したところであり、「感二鳥賦」などは、青年期において、自己の歎きを綴つた作品であるが、これは、宮中へ獻上される白烏と白鴿の二鳥の籠が役人達に守られて、供廻りの行列も嚴めしく運ばれてゆくのを、落魄離京し、歸鄉する道中で遭遇した韓愈が、このように大切に扱われている鳥に比べて自分の餘りにみぢめな狀態を、まともに歎いている作品で、その歎きには救いが無い。ところで、有名な「進學解」は、國子博士として在任中、卽ち四十五歲の年に書かれたもので、「送窮文」などとほぼ同じ頃の作品である。國子博士とい

うのは閑職であり、この文は二度目の國子博士の勤めの時に書かれたものであるが、唐書の韓愈本傳には、「再び國子博士となる。既に才高くして數々黜けられ、官又下遷す。乃ち進學解を作り、以て自ら喩す」と述べてあるように、不平の境地にあり、心理的に彼が陷りつつあつた窮地を自ら打開し、達觀への道を拓こうとして、且つは自ら嘲り、且つは自ら慰め喩して、その心境を寛やかにしようと努力して作つたものであつた。これより先、韓愈は元和六年六月、國子博士を拜命したが、韓愈の上遷を嫉む讒言者の口を恐れ、翌年の夏の末には、自ら希望して東都洛陽の國子監分校の教官として赴任し、その後元和五年仲冬に至つて、河南縣令の職を授けられ、元和六年秋に入つて、尚書職方員外郎に任ぜられ、久しぶりに長安へ歸つた。然るに翌七年二月、彼は下遷させられて、復び國子博士と爲つた。「進學解」の作られたのは此の時期であつた。この文章は、漢の東方朔の「答客難」や楊雄の「解嘲」の流儀にならつたもので、作者自らの苦境の立場を、自ら解寛し、人にも辯解するという體裁のものである。中身はこうである——

「彼が大學生どもを集めて一席訓示を垂れていると、學生の一人が進み出て、「先生は大へん努力して學問に勤め、文章も素晴らしいものだが、先生自身の運命はよたよた續きで、役目もよい職についたかと思えば、忽ち左遷させられ、冬暖かくても、お子さんは寒さにわめき、稔豐かでも奥さんは飢えに泣いておられる。死んでも世の爲めになると思われぬ先生が、反つて我々を教えておられるとはいかなることでしよう。」とからかう。そこで先生はこれに對し、大いに自分の立場を辯ずるというのがその概略の內容であるが、學生の揶揄も、先生の辯駁も、滑稽諧謔の味をたたえていて、自らユーモアの氣分豐かな名文である。この文章が時の執政の目にとまり、此の奇文を愛した執政は韓愈を比部郎中史館修撰の職に上進せしめることとなつた。これは彼のユーモアをたたえた文章が、先ず彼の氣分を寛やかにする效用をはたらき、やがて又、上官の心を感動させて彼の地位を上進せしめるという效用をまではたらいたわけで、文章における諧謔、ユーモアの發揮する力量が、思いの外に大きいことに感歎せざるをえない。

第三に老衰について——。

老衰の現象は人生痛恨の一大事で、髪に白いものがふえ、歯が抜け落ちるというような出來事は、それに氣づき、又はその事に出會う時には、中々に大きな衝撃を心に感ずるものである。いかに中國の多くの詩人たちが、白髪に驚いたり、歎いたりする詩歌を作つているかを見るにつけても、老衰のいち早い表徴である白髪の發生が、人生の秋を個々の人間の胸臆に刻印づけることの深さを改めて思い知らされるのである。韓愈は三十代にして早くも白髪の多きに驚き、歯も四十代になつてその半以上が脱落したのに膽をつぶした人である。彼においては、歯の脱落が殊に心を驚かせたらしく、歯の抜けたことを敍べた詩や文章は二三にとどまらず(7)、彼は常に深刻な氣持ちで、自分の老衰を意識し、長生きも難しいなどと憂いているのである。「落歯」の詩はその冒頭の句を讀めば、驚天動地の衝撃に似たものを感じ、韓愈の動悸をぢかに傳え聞くような氣がして、揺らぎ落ちる歯に對して韓愈が抱いたであろうところの不安、驚愕に深い同情を催すのである。すなわち、

去年落二一牙一　今年落二一歯一　去年一牙落ち、今年一歯落つ、
俄然落六七　落勢殊未レ已　俄然落つること六七、落勢殊に未だ已まず、
餘存皆動揺　盡落應二始止一　餘の存するも皆動揺す、盡く落ちなば應(まさ)に始めて止むべし、
憶初落レ一時　但念二豁可レ恥　憶ふ初め一を落せし時、ただ豁として恥づべきを念へり、
及レ至レ落二二三一　始憂二衰卽死一　二三を落とすに至るに及び、始めて衰へ卽ち死なんかと憂ふ。
（以下略）

と彼は歌い起している。然し韓愈はこの詩の後半においてはいささかユーモアを混えた強辯を試みて、自ら解悶し、自ら慰喩しているのである。

人言歯之落　壽命理難レ恃　人は言ふ、歯の落つる、壽命、理として恃みがたし、
我言生有レ涯　長短俱死爾　我は言ふ、生は涯(かぎり)あり、長短俱に死なんのみ、

人言齒之豁　左右驚諦視
我言莊周云　木雁各有〻喜
語訛默固好　嚼廢輒還美
因歌遂成〻詩　持用詑〻妻子〻

人は言ふ、齒の豁たるや、左右のもの驚きて諦視すと、
我は言ふ、莊周の云へるに、木雁各〻喜ぶことありと、
語訛すれば默する固より好し、嚼廢すれば輒なる還たうまし、
因りて歌ひて遂に詩を成し、持し用つて妻子に詑る、

人は齒が落ちたら、もうあとの壽命も長くは無いというが、私はどうせ涯りある生命のこと、長くとも短くとも、どつちみち死ぬことは同じだと言おう。人は齒が抜けてガラリとすき間が出來ると、あたりのものがびつくりしてじろじろ見ると言うが、私は莊周も言つたように、不材の木は斬られずに濟み、鳴くことのできる雁は殺されずに濟む。材と不材とはそのいずれも、時によつて自分に都合よい場合があると言おう。言葉の發音が變手古になれば、沈默しているのもよい。物が嚙めなくなつたら、軟いものも亦うまいではないか。そこでこのことを歌つて此の詩をつくりあげ、もつて細君に向かつて自慢したというのである。「詑」の一字は祝充が注して、莊子の「踵〻門而詑〻子扁慶子〻」の注に告也、嘆也、とあるのをひいておる外、方世擧は子虛賦の「子虛過詑〻烏有先生〻」に對する張揖の注、「詑・張也」を擧げているが、辭源には「誇」という解をも載せている。「詑」を告げる、歎くなどと讀んでは、この詩のユーモアは皆無となる。「張る」「誇る」と讀んで始めて、强辯する韓愈の心情が表われて、ユーモアの氣分を發するのである。その悲愴感のこもつた强辯の中に、私は悲境は之を超克し、逆境は之を笑殺するところの武器としてのユーモアが、韓愈先生には所有されていたことを認める喜びをもつのである。

六

諧謔の對自的效果がどのように發揮されているかを見ることができたから、次に韓愈の作品の中に、自己以外のものに對して、この諧謔、ユーモアはどのような現れ方をしたかを檢討して見たいと思う。韓愈の作品を通して考えて

見ると、その現れ方に一應三つの場合を分けることができるのである。其の第一は、自然界における事象を滑稽、ユーモラスに描寫した場合である。自然の事象そのものは可笑しいものでも滑稽なものでもないはずのものである。然し人間の心の眼を通し、主觀のレンズにかけると、そこに滑稽な感じ、ユーモラスな趣という色合がついてくる。そして往々それは誇張や聯想などが伴なうのである。そのような作品の例としては、「陸渾山大」「和侯協律詠筍」「苦寒」などを擧げることができる。其の第二は、人間に對する調謔である。人間同志の調謔は深刻になればいさかいを招くもともとなるが、普通の場合においては、一種の遊戯であり消閑のわざでもある。人間同志の遊戯本能の一つの現れとして、そこに調謔があるのだと考えてよいのではあるまいか。そしてこの部類に屬する作品として、「嘲鼾睡詩」や「劉生詩」を擧げることが出來る。「答柳柳州食蝦蟇」の詩もこの部類に入れてよいかと思う。第三の部類のものは、始めから滑稽諧謔の氣分で以て、事物なり物語なりを敍述しようとするもので、これは人間の創作意欲の中の一つの態度であり、又一種の高等なる遊戯本能の現れでもある。この場合は、韓愈においては滑稽譚詩、或は諧謔的な史傳小說として作られている。「讀東方朔雜事」と「毛穎傳」などがこれに當るものである。

先ず第一に自然界の事象を滑稽、ユーモラスに描寫した例を見よう。「陸渾山火」は山火事の猛烈な火勢を火神祝融やその部下どもの亂舞饗宴の樣に見立てて、ユーモラスな描寫をしていることはすでに述べた。「和侯協律詠筍」は侯協律の作に和して、筍を詠じたものであるが、筍の所嫌らわぬ猛烈な發生ぶり、成長ぶりを、誇張の筆を用いることによつてユーモラスに描寫し、誇張的描寫によつて、ダイナミックな筍の生態を如實に印象づけているのである。詩は「竹亭人不到、新筍滿前軒」というに始まり、漸く並らび出で、雨を得て次第に勢をえ、はじめにはまだ群り生えながらなお隙間の見えたものが、忽ちそこらじゆうを占めて擴がるさまを描敍し、ついには、

縱横公占地　羅列暗連根
狂劇時穿壁　群强幾觸藩

縱横公けに地を占め、羅列して暗に根を連らぬ、
狂劇にして時に壁を穿ち、群强ほとんど藩に觸る、

（あたりかまわず、おおつぴらで土地を占領し、ずらり列んで人知れず根で連なり合つている。めちやな劇しさで時には壁に穴をあけ、群がつて強そうなのがほとんど藩にすれすれに觸れんばかりの有様だ。）

という次第。「公」の一字、おおつぴらでというような氣持ちであろう。此の一字、筍の横着ぶりを描きえて、極めてユーモラスである。竹の猛勢はついに

穰々疑翻レ地　　森々競塞レ門　　穰々として疑ふらくは地を翻すかと、森々として競ひて門を塞ぐ

という狀態に至る。これは誇張的な描寫によつて、ユーモラスな氣分を發揮しているのである。朱彝尊はこの詩について、「此是譏二時相門下人一、細味自見、描二寫情狀一、儘有二深致一。」と述べ、程學恂の韓詩臆說には、「此詩中含二譏諷一無レ疑。」と言い、時の宰相李逢吉一派が勢を挾んで黨を植て、姦慝を包藏していた狀況を譏諷した諷刺詩と見られているが、そうとすれば、一層筍の猛勢を諧謔的にユーモラスに描寫することによつて、諷刺の目的は巧みに成就されているわけで、皮肉の針は諧謔の鞘に祕められて、相手の虛に乘じ得るというものである。

次に「苦寒」の詩篇は、貞元十九年三月の大雪の時に詠じられたものと考えられ、劇烈な寒冷狀態は、ユーモラスな描敍によつて、その效果を倍加している。悲苦の境は謔語をもつて語られて、却つて悲苦の色調を明瞭にするという手法だといつてよい。すなわち、

「濁醪沸入レ口、口角如レ銜レ箝」

（濁り酒を沸して口に入れると、口のはたは（氷りついて）さるぐつわをかまされたようだ。）

といい、

「熒惑喪二纏次一、六龍冰脫レ髯」

（南方の火星も軌道をふみ外し、太陽の車をひく六龍の髯も、氷つて脫けおちた。）

というが如き、前者は如實の描寫とも、やや誇張した描寫とも受けとれ、後者は誇張的な空想を展開し、いずれもユ

ーモアに富んだ酷寒の描寫表現である。韓愈は此の酷寒のために雀さえもむしろ死ぬ方がましだと思うばかりであろうと想像して、

「不レ如二彈射死、却得二親魚爛一」

（彈でうたれて死んだ方がましだ、そしたら却ってあぶられ溫められることができよう。）

と、寒さに戰く雀の心情を推察しているのが、諧謔を含んで悲愴である。

次に人間に對する調謔を含んだ作品について述べよう。先ず「嘲二鼾醉一二首」は、澹公和尚の鼾醉を嘲つた詩で、これは始めから嘲笑が目的なのだから、全篇これ諧謔、全篇これ調笑で、これは全詩をそのままに示し、翻譯を添えて、讀者の鑑賞に供することにする。

嘲二鼾睡一　　鼾睡を嘲る

（其　一）

澹師晝睡時　澹公和尚が晝寢する時
聲氣一何猥　みだりがわしき聲音（こわね）かな
頑飈吹肥脂　つむぢ風肥えし脂を吹き
坑谷相嵬磊　穴ある谷は鳴り響く
雄吼乍咽絕　雄叫びの忽ちに咽び絕えては
每發壯益倍　いや更に又勇ましく鳴り出づる
有如阿鼻尸　長泣きはもろもろの罪を忍べる
長喚忍衆罪　阿鼻の死人もかくやとばかり
馬牛驚不食　馬や牛さへ驚きて物をえ食わず

百鬼聚相待　鬼どもは聚りて待ち受けるかな
木枕十字裂　木枕は十字に裂けて
鏡面生痱瘤　鏡さへ鳥肌立てり
鐵佛聞皺眉　金佛も聞きては眉をうちしかめ
石人戰搖腿　石人も戰きて腿をふるわす
孰云天地仁　天地を惠み深しと誰か言ふ
吾欲責眞宰　吾は主宰の神を責めなん
幽尋虱搜耳　幽けきときは耳さぐる虱のごとく
猛作濤翻海　猛りては逆まく濤かと疑わる
太陽不忍明　太陽は輝くことをうち忘れ
飛御皆惰怠　日の御者も皆怠りぬ
乍如彭與黥　たちまちに彭越や黥布らが
呼寃受葅醢　寃を叫びつつ死につく如く
又如圈中虎　又檻の中なる猛き虎の
號瘡兼吼餒　瘡に苦しみ餓ゑに吼ゆるがごとし
雖令伶倫吹　伶倫に笛吹かせても
苦韻難可改　耳ざわりなる韻をば改めがたし
雖令巫咸招　巫咸に祈り招かせても
魂爽難復在　かの魂を喚ばひもどさむ力無し

何山有靈藥　いづくの山にか靈藥あらば
療此願與採　採りて療やさむすべもがな

（其　二）

澹公坐臥時　澹公和尚がねねむりする時
長睡無不穩　眠りこけたるしたり顔
吾嘗聞其聲　われ嘗てそのいびきの聲を聞きけるに
深慮五藏損　五臟損はれんかとおそれたり
黃河弄潰瀑　黃河がしぶきを噴きあげて
梗澀連拙鮀　流れふたがり鮀の手に負へざるばかり
南帝初奮槌　南の帝が初めて槌をばふるひ
鑿竅洩混沌　混沌の帝に竅（あな）をうがちたれば
迴然忽長引　忽ちに長き息づかひはるかにゆきて
萬丈不可忖　いづくまでとも行方はかれず
謂言絕於斯　しばらくは音絕えしかと見れば
繼出方袞袞　ついで又こんこんと響き出でたり
幽幽寸喉中　喉の中いと深きところ
草木森茱萸　草や木の茂りもやする
盜賊雖狡獪　盜賊のたくみのわざも魂（たま）消えて
亡魂敢窺閫　その奥底を敢てはからず

鴻蒙總合雜　鴻蒙の聚りて又散るがごと
詭譎駛戾狠　物の怪の荒らびつつ駛せまはるごと
乍如鬪吸吸　ある時はあらがひてわめくかと見え
忽若怨懇懇　ある時はねもごろの怨み言聞くがごとし
賦形苦不同　同じ形を受けつつもなどかくばかり異なれる
無路尋根本　その根本を探るすべなし
何能堙其源　いかにせばその源をふさぐべき
惟有土一盃　有るはただ一杯の盃の土のみ

澹師というのは、韓愈の「送下諸葛覺往二隨州一讀書」の詩に、韓醇が注して、「諸葛覺は、或ひは云ふ卽ち澹師なりと。公の逸詩に澹師鼾睡二首有り、此の人の爲めに作る」と述べているのによれば、諸葛覺のことである。諸葛覺は、韓愈が國子博士として東都洛陽の分教に勤務していた頃、訪ねて來た人である。よほど劇しい鼾をかく人と見えて、韓愈はその可笑しさに、甚だしく誇張した描敍の筆を弄んで、その鼾睡ぶりを調戲したのである。ただこの詩について一言いい副えておかねばならぬことは、淸の高宗の唐宋詩醇に、

若し夫れ集外の遺詩、「嘲鼾醉」「辭唱歌」の如きは、淺俚醜惡、假託なること疑ひ無し。直ちに應に削り去りて、これを集中に列するを容さざるべきものなり。

と述べていることである。確かに「嘲鼾醉」の詩の如きは、韓愈の他の詩と比べれば、全詩盡く揶揄、調謔の文句に充ち、品が惡いと言えば云える作品には違いない。然しただそれだけで簡單に何人かの假託の作だと言い切つてしまうことは許されてよいであろうか。詩句の運びや、文字の用法などから見て、韓愈の作ではないと全く否定することもできぬものがあるように私には思われる。陶淵明の全集の中にある「閑情賦」が、淵明作中の白璧の微瑕だと批評

されるが、その批評の精神を裏返した行きかたが、韓愈の「嘲鼾醉」のような作品を、他人の假託の作だとして排除してしまう考え方にもなるのだということはできぬであろうか。

「劉生詩」も亦、人に對する諧謔を含んだ作品の一例である。これは貞元廿一年、劉師命という人物が、湯山の令であつた韓愈を訪れた時、愈が作つたもので、送行の氣持ちで歌われている。その中で韓愈は、劉師命が北支那から南へ旅して來て、越の地に三年、嶺南廣東の地に十年とそれぞれ滯留して、故郷に歸らないでいるのを、

越女一笑三年留　　越女の一笑に三年留まる

といい、又更に、

問二胡不一歸良有一由　　胡んぞ歸らざると問ふにまことに由有り
美酒傾一水炙二肥牛一　　美酒は水を傾け肥牛を炙る
妖歌慢舞爛不一收　　妖歌慢舞爛として收まらず
倒一心廻一腸爲二青眸一　　心を倒にし腸を廻らし青眸を爲す
千金邀顧不一可一酬　　千金邀顧すれども酬ゆべからず
乃獨遇一之盡二綢繆一　　乃ち獨り之を遇して綢繆を盡くし
瞥然一餉成二十秋一　　瞥然一餉十秋を成せり

と歌い、越における三年間の滯留は、美女の媚態に惹かれてのこと、嶺南の十年は、その土地の美酒は水を傾けるような豐富さだし、牛肉の味もよし、そこへ千金を以てしても滅多に人に靡かぬという志操堅固な廣東婦人が、獨り彼にはねんごろにしてくれたばかりに、あつと思う間に十年過ぎたのだというのである。その艶福家の劉師命に勉強して都に上り、出世の手段をとれと勸めているのが此の詩である。艶福をそのまま師命の人德の致すところとして讀むならば、この詩に諧謔やユーモアの要素はないことになる。ところが「韓詩臆說」を書いた程學恂は、この詩につい

て意見を敍べ、「公の詩は多く滑稽諧謔に渉る。正言に非るなり。若し正言と爲せば、公も亦色に嗤(したし)むものか。」と批評している。程學恂の意見は、劉師命が南方の地に三年、又十年と滯留するに至つたのを艶福に理由づけたのは、韓愈の冗談であり、諧謔であると見ようとしているのである。さもなくて韓愈がその艶福を正面から歌い上げているのなら、韓愈その人も亦、色好みな人であつたと言わねばならぬという見解である。これは中國人の道義的感覺に立脚した意見に外ならない。師命のために回護の筆を用いるとすれば、滯留の長きを別の事にかこつけて歌わねば仁義に外れるというのであろう。そこで私もこの詩は一種の冗談、諧謔を含んだ詩と見て、ここに取り上げた次第である。

「答柳柳州食蝦蟇」の詩篇もここにとり上げてよい作品の一つである。これは韓愈が潮州の刺史として在任し、柳宗元が柳州の刺史として在任していた時の作で、柳宗元が蝦蟇を食べたという詩を寄こしたのに對して、韓愈が答えた詩である。柳宗元の詩はその全集に見えないから、散逸したのであろう。蝦蟇を食べる習慣は南支那に行なわれていて、韓愈も始めは喉を通らぬ思いであつたが、近頃次第に食べ馴れて來たとこの詩の中で書いている。彼はこの詩において先ず蝦蟇の博物學的な敍述から始めて、その鳴聲の噪がしさを大げさな誇張の筆を用いて書き立て、

我棄愁海濱　我れ棄てられて海邊に愁ひ
恒願眠不覺　この眠覺めざれと恒に願へど
巨堪朋類多　うからあまたの蝦蟇どもが　（巨＝不可也）
沸耳作驚爆　耳もと沸かすおどろ聲
端能敗笙磬　笙磬の樂の調べをうち負かせ
仍工亂學校　あまつさえ書讀むわざを亂すめり

と迷惑のほどを敍べ、それから蝦蟇が越王句踐に敬意を拂わせた史實や、漢の武帝の元鼎年間に、蛙族と大合戰を起した話を引き出し、然る後蝦蟇が食用となることを言い、自分は初めは喉を通らなかつたが、近頃はどうやら少しば

かり食べられるようになつたが、常に懼れることは、蠻夷の風習に馴染んでしまつて、平生の好樂を失つてしまいはせぬかということだと反省の言葉をのべ、最後に、貴公はそれを豚や豹のように珍重しておられる樣子、あまり惡食して親不孝をするな、無事に故鄕に歸れるようにせられよ、と忠告しているのであつて、全體の詩の調子が、韓愈一流の戲文めいた運びを以て終始している。朱彝尊が「只是れ戲筆、下句は故らに俚を爲して以て快を取る。亦俳諧の類なり。」と評している所以である。

第三の類としての滑稽譚詩、及び戲文的小說として、「讀東方朔雜事」と「毛穎傳」とを擧げることができるが、「毛穎傳」については、すでに前文の中で說明を行なつたから、ここでは「讀東方朔雜事」についてのみ述べる。これは東方朔が惡戲の擧句、西王母の宮殿を逐われ、漢の天子の御殿に仕えることとなるが、そこでも駄法螺ばかり吹き、とどのつまりは眞晝間殿中で放尿し、辭乞いもせずに靑空高く飛び去つたという滑稽な物語詩であるが、この滑稽で可笑味を含んだ譚詩は、近世のゲーテなどの輕妙にしてユーモアをたたえた譚詩を讀むのと同樣な新鮮な感じを與えるのである。その詩は次の通りである。

嚴々王母宮　嚴めしい王母の宮の周りには
下維萬仙家　大勢の仙人たちの家が立ちならぶ
噫欠爲飄風　息やあくびはつむじ風となり
濯手大雨沱　手を濯う滴は大雨となる
方朔乃豎子　東方朔はお小姓で大威張り
驕不可禁訶　お叱言を食うこともない
偷入雷電室　ある日こつそり雷公の室にしのび入り
轟轟掉狂車　ごうごうと氣狂い車を動かした

王母聞以笑　王母は聞いて大笑い
衞官助呀呀　近從たちも一緒にアッハッハ
不知萬萬人　千萬の人民どもが泥土の中に
生身埋泥沙　生き埋めになつたのも御存知ない
簸頓五山踣　五つの仙山はひつくり返り
流漂八維蹉　天の八維も漂い傾いたのだ
曰吾兒可憎　そこで王母は申された、「この子の憎らしさ、
奈此狡獪何　このわるがしこさを何としよう。」
方朔聞不喜　方朔聞いて喜ばず
褫身絡蛟蛇　蛇を身體にまきつけて宮を脱け出し
瞻相北斗柄　目についた北斗の星を横目に睨み
兩手自相揆　兩手でその柄をもみつけた
羣仙急乃言　仙人達は大あわてで申すには
百犯庸不科　數々の罪、赦しておけぬところです
向觀睥睨處　先ほど横目で睨んだあの様子では
事在不可赦　今度こそとても容赦はなりません
欲不布露言　事立てて申すまいとは存じましたが
外口實諠譁　他人の口がまことに喧ましうございまして
王母不得已　王母はどうにもしようなく

顔嚬口齋レ嗟　額をしかめ、歎息をつき
頷レ頭可二其奏一　うなづいて申し出をお容れになり
送以二紫玉珂一　紫の玉を與えて追い出しなされた
方朔不二懲創一　東方朔は懲りもせず
挾レ恩更矜誇　御恩をかさに一層大威張り
詆二欺劉天子一　漢の天子にお仕えして法螺を吹き
正晝溺二殿衙一　眞晝間御殿で放尿し
一旦不二辭訣一　それからふいと辭も乞わず
攝レ身凌二蒼霞一　青空遠く飛び去つた

七

このように見てくると、韓愈は自己自身に對し、又自己以外の人物や事物に對し、往々好んで冗談や諧謔を發揮しユーモアの氣分に富んだ人柄であつたことがわかる。その韓愈も「論佛骨表」にからんで、潮州刺史に貶謫され、嶺南瘴癘の地に職を奉じなければならなくなつた當時は、全く深刻な氣分に陷り、ユーモアも笑いも失つた人となり、潮州への途次に作つたかなりの數の詩篇を讀んで見ても、哀愁、悲傷の感の深いものが多く、運命に對する達觀、諧謔による自己解放というような傾向のものを見出だすことが出來ない。彼は潮州へ着任すると早々に憲宗皇帝へ謝上表を奉つているが、その上表文の中には日頃の硬骨漢に似ぬ弱氣が見えており、自分の健康上、生命上の危惧から、もう少しよい土地へ轉任させて欲しいと泣訴哀願しているのである。然し私は此の地に於ける韓愈の半歲の業績の中から一つの政治的冗談の實踐を發見するのである。彼が潮州への着任後間も無く、土地の人々から惡溪というところ

に鰐魚が住んでいて、家畜を荒らしたり人に害を與えたりして、ほとほと困つているという訴えを聞いた。そこで韓愈は早速鰐やらいの祭式を執行し、「鰐魚文」というものを書いて、祭祀の執行官に讀ませた。其の文章自體は堂々と鰐に向かつて警告を發し、若し自發的に土地を退散しないなら、兵力をさしむけて退治するぞという宣言をなしたものであるが、相手が鰐であるだけに、堂々と威武を張つたその文章が、却つてユーモラスに感じられる。荀子の「天論篇」の中に、雩祭をするからとて雨が必らず降るというものではない、而もそれを敢て行なうのは、それを以て政治を修飾するのだという意味のことが論じられている。韓愈の鰐魚やらいの祭も、恐らくはそれと同じような氣持ちで行なわれたのであろうが、或はかかることが效能あるものとして、一つの信仰的行事又は呪術的行事として執行される風習があつたのかも知れない。そして韓愈は大眞面目でこれを執行したに違いないのだが、私の目には、これは政治的冗談として映じる。さて祭式の執行された當夜、偶然大雷雨が起こり、長湫の水がひき、潮州から西に數十里離れたところまで鰐の住む場所が移動して、それ以後潮州は鰐魚の害を免れることが出來たという結果が生じた。偶然の天變地異が、韓愈の行政に花をそえる幸運な結果を招いたわけであるが、私には政治的冗談が思わぬ駒を出したという感が深い。

韓愈の詩文に現れた諧謔やユーモアを論じたが、決してその全貌を盡しえたものではなく、寧ろただ議論に便宜なものをえらびとつたに過ぎないといつてよい。歐陽修の六一詩話に、「退之の筆力は、施すとして可ならざるなし。而して嘗て詩を以て文章の末筆と爲す。故に其詩に曰く、『多情懷=酒伴-、餘事作=詩人。』と。然れども其の談笑に資し、諧謔を助け、人情を敍し、物態を狀するや、一に詩に寓して、其の妙を曲盡す。」といい、韓愈の作詩に諧謔の發揮ということが大きな要素の一つになつている事を論じているのは、大いに認むべき意見である。韓愈は詩豪として前代の杜甫や李白を大いに崇敬しているが、愈がこれらの大詩人に比して出色の一點は、この諧謔やユーモアの豐富なところにあるといつてよい。杜甫の詩には、諧謔、ユーモアの調子は極めて少い。概して杜甫は事柄をも感情をも

まつとうに敍寫し、極めて緊張した精神狀態を持續していたように見える。杜甫の詩集には、「戲簡鄭廣文」「戲作花卿歌」「戲贈友」その他戲題、戲作、戲寄というような文字を冠せた題名の詩が數篇あるが、それらを讀んでもユーモアの度合は極めて少く、やはりまつとうで生眞面目なものが感じられる。「戲作俳諧體遣悶二首」の如きは、明かに俳諧體と斷つてあるが、これも土地の風俗の事變つているおかしさを敍べたもので、作者のユーモラスな觀察とか諧謔的な描寫とかにはなつていない。李白の詩も浪漫的情緒に獨自の發想はあつても、ユーモアや諧謔の調子をもつたものは少い。有名な「月下獨酌」は、月とわが影とを擬人化して、これらと自分とで三人と成ると自得して、花の下に飲むという發想で、そこに一種のユーモアがあるが、然しユーモアよりは寧ろ超脱の意想の方が深い。「贈ㇾ內」という一篇の小詩は、奥さんに贈つた詩で、

三百六十日　日々醉如ㇾ泥
雖ㇾ爲二李白婦一　何異二大常妻一

といつているのは、いかにもユーモアたつぷりの作品だが、數少い珍らしい例のものである。要するに杜甫や李白に較べて、韓愈は諧謔の精神、ユーモアの氣分をはるかに多く所有した文人であり、詩人であつたのである。

韓愈の諧謔やユーモアは、何よりも先ず彼の天分素質の所産であると言わねばならない。そして彼の豐かな空想力、連想力が、この諧謔の發揮、ユーモアの醞釀を大いに助長するところがあつたのである。そして諧謔が戲文やフィクション的要素に富む詩篇として表れた場合の多いのは、確かに當時大いに盛となつていた短篇小說愛好の風潮と緣の無いものでは無く、韓愈も亦、その創作意欲を、たとい一度は張籍などからたしなめられたことがあつたにしても、押えることが出來ずに、時に隨つて發揮したものであると見てよいと思う。尙お過去の文學の影響も亦、可成り多いであろうことを認めねばならない。その影響の一つとして考えられるのは、莊子の文章である。彼は老莊道釋を異端としながら、莊子の文には敬服していたことは、「送二孟東野一序」「進學解」などを讀めば了解できる。莊子の寓言滑

稽の筆致は韓愈の大いに學ぶところであつたと見てよい。第二に東方朔や揚雄の文章の影響である。「進學解」が東方朔の「答客難」や、揚雄の「解嘲」に倣つた作品であることは否定できぬことであり、なお韓愈は揚雄をば思想家としても文章家としても大いに高く評價しておるし、東方朔については、「讀東方朔雜事」という詩を書いているように、相當興味を以て見ていたのであるから、この二者の影響ありと見てよい。第三に六朝の俳諧文の影響がある。宋の葉夢得の「避暑錄話」に、韓愈の「毛穎傳」について、「此本南朝俳諧文驢九錫、鷄九錫之類、而少變之耳。俳諧文雖出於戲、實以譏切當世封爵之濫。」と述べており、それが南朝の俳諧文の影響を受けた作品であることを指摘しているのである。

此の小論の結尾を、韓愈が自ら演出したユーモラスな逸事で以てしめくくりたいと思う。李肇の「國史補」という書物に、

「韓愈好奇。與客登華山絕峰。度不能返、發狂慟哭。爲遺書華陰令、令百計取之乃下。」

という逸事が記載されている。華山の絕峰に登つたには登つたが、さて降りられなくなり、氣狂いのように泣きわめいたという韓愈の姿を想像すると、まことにユーモラス以上のものがあるが、然し此の記事の眞僞のほどを確めるすべはないのである。

（一九六一、七、二一）

（備　考）

(1) 蘇子瞻在黃州及嶺外、每旦起、不招客與語、必出訪客、所與遊、亦不盡擇、各隨其人高下、談諧放蕩。不復爲畛畦、有不能談者、則强之使說鬼、或辭無有、則曰姑妄言之。（世說新語補、「任誕」下。引何氏語林。）

(2) 「奇險」という評語――

「韓昌黎生平所心摹力追者、惟李杜二公、顧李杜之前、未有李杜、故二公才氣橫恣、各開生面、遂獨有千古、至昌黎時、李杜已

在前、縱極力變化、終不能再闢一徑、惟少陵奇險處、尙有可推擴、故一眼覷定、欲從此闢山開道、自成一家、此昌黎注意所在也。」（以下略）――（趙翼、甌北詩話）

(3) ある人の說――

國譯漢文大成、韓愈詩集の解釋に引く。ある人不明。なお、これに近き說あり、左の如し。

黃鉞增注證訛曰、此詩似急就篇、又似黃庭經。

沈曾植海日樓札叢曰、作一幀西藏曼荼羅書觀。

(4) 劉開榮著「唐代小說研究」第二章「傳奇小說勃興與古文運動、進士科舉、及佛敎關係」の項參照。

(5) 同上。

(6) 黃雲眉著「韓愈柳宗元文學評價」に詳論がある。

(7) 齒について歌つた韓愈の詩文。

（與崔羣書）近者左車第二牙、無故動搖脫去。（江陵道中）自從齒牙缺。（感春）語誤悲齒墮。（贈崔立之評事）齒髮早衰嗟可閔。（送侯參謀）我齒豁可鄙。（贈劉師服）今我呀豁落者多。所存十餘皆兀兀。（寄崔二十六立之。）所餘十九齒、飄々盡浮危。等々